Ⅲ　遺跡の総括

本荘北地区で実施した1321調査地点・1322調査地点・1325調査地点は、Ⅱ章でのべたように、古代と近世の遺構・遺物を検出した。しかしながら、広範囲にわたった調査も小さな調査区の集合体であり、各調査区を俯瞰すれば遺構は一部を切りとるように掘削せざるを得ず、全容の把握は難しい。

本章は、本学では近世遺構として初めて本格的な発掘調査事例となった井手遺構について考察し、まとめとする。

1．井手遺構

熊本県を代表する４つの大河川（菊池川・白川・緑川・球磨川）は、熊本県の豊かな農業を支えているイメージがあるが、実は流路が長いわりに農業への恩恵が少ない川と言われる。白川は、浸透性の良い台地と沖積平野を流れるため漏水が甚だしい。そのため平時は水量が少なく、日照り気味になるとたちまち枯渇するが、雨が多いと氾濫し、泥害を起こすのである。加藤清正は、このような熊本の河川の治水と、農業の振興に腐心した。その功績の一つが、熊本市内を今なお流れる井手である。

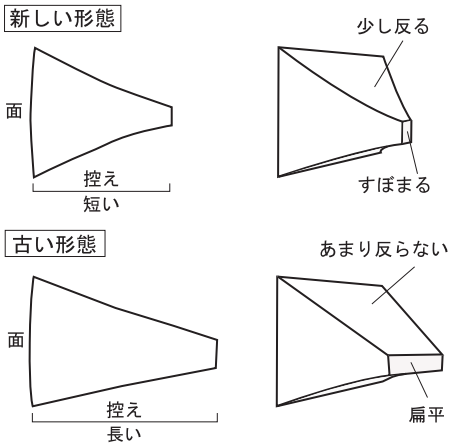


図72　間知石の形態

本学から上流へ約800m、白川の蛇行が南から北へ転じてまもない地点に、渡鹿堰（とろくせき）という堰が設けれており、白川から井手が引き入れられている。白川から分流し、ここから流れる最初の井手は「大井手」と呼ばれ、白川と平行しながら西南西に向かって流れて行く。直線距離で約1.7km下流の地点、熊本市消防局近くで「一の井手」が分岐して南流する。この分岐地点から約300m下流で大井手から「二の井手」が、さらに約60m下流で件の「三の井手」が分岐し、白川下流域に行きわたるのである。

間知石　1321調査地点30区で検出した三の井手の石垣については、前項で述べたように20個の間知石を検出した。間知石の形態は、時期によって少しずつ変化をしており、特徴はおおむね図72のようである。間知石は、積んだときに石垣面を構成するの面（つら）と、裏側に突出した控えから構成されるが、新しい間知石は控えが短く反っており、末端が小さくすぼまる。現在のコンクリートブロックもいわばコンクリート製間知石で、もっともその特徴を示しているといえる。古い形態の間知石は、控えが長く、ヘラ状に薄くなるが反らず、端部はすぼまらない。30区で検出した間知石は、後者の形態を良く示している。間知石に、図73のように北側から順に１～20の番号を付した。１～５は調査区壁に埋まっており、全体の様子が分かるのは基本的に６～20までである。これらの大きさは表６の通りである。幅は、最小34cm、最大47.5cmで全体的にバラツキがあるが、43cm前後と36cm前後に数値の中心があるようにも見える。長さは、最短36cm、最長49.5cmで、長さもバラツキがあるが、46・47cmが最も多い。厚さは、最小26.5cm、最大29.5cmであるが、27cmを中心としていることが分かる。16～19の数値では、面は少し横長の長方形である。石材は安山岩である。既に動いていた間知石（幅34cm×厚さ33.5cm×長さ49cm）の重量を計ったところ、76.5kgだった。使用された間知石は、80kg前後であったと推測される。図74のように間知石には、石材を割る際に生じる矢穴の痕が認められた。幅約５cm×深さ約３cm程度である。勿論、石を割り取ってから加工を施した最終段階の間知石をみているのであるから、本来はもう少し大きなものと想定されるが、桃山期後半段階では幅12～15cm×深さ約

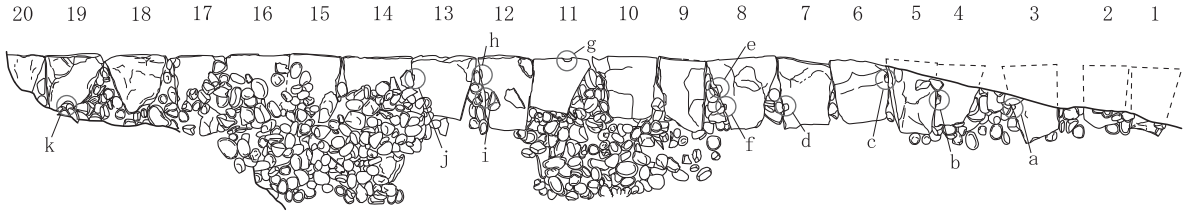
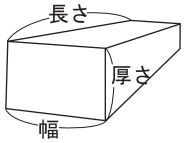


図73　井手遺構の間知石と矢穴の位置関係図（S=1/50）



間知石No.	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
幅	―	35	46	32	42.5	36.5	36	43	47.5	34	43	35.5	42	38.5	―
長さ	41.5	47	47	47	46	36.5	49.5	43	―	―	―	36	39	―	―
厚さ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	29.5	27	27	26.5	27.5

（cm）

表６　間知石の属性

図74　井手遺構の間知石と矢穴

10cmほど、熊本城の築城当初のものは幅８cm×深さ６cmほど、明治期には幅３cm×深さ３cm程度に小さくなるとされることから、30区で検出した間知石の矢穴は、時期的にはやや新しい特徴となる。

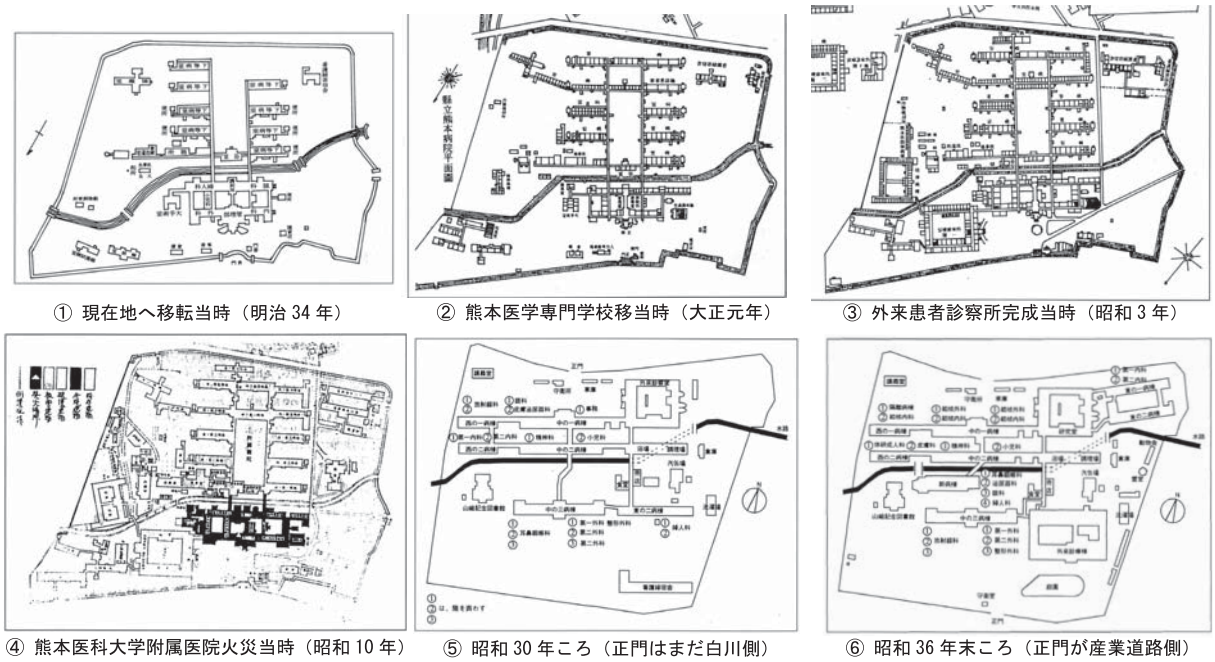
井手遺構の年代　肥後藩加藤時代における白川の治水・灌漑のための堰や井手の築造は６件、うち５件が加藤清正によるとされる。三の井手は加藤清正によるものの一つで、築造年代は慶長11（1606）年～慶長13（1608）年と言われる（本田1970）。検出した石垣は、①石積みに大きさや形態を整えた間知石を利用する、②積み方はいわゆる谷落とし（矢羽根積み）ではない、③裏込めは割り石ではなく玉石による、④間知石の形態や矢穴はさほど大きくない、等の特徴から、江戸時代後期の所産と考えられるとの教示があり、加藤清正が築造したとする年代とは大きなずれがある。こうしたことから、井手は江戸時代後期にいたるまでに流路の変更や改修がなされたと考えられる。

井手の流路の変遷　本荘北地区を流れる現在の三の井手は、今回の発掘調査の結果、江戸時代とは流路が異なることが判明した。また、年代のずれもある。そこで、三の井手の流路の変遷とその契機について、少し探ってみたい。

図75は、本荘北地区における三の井手の流路と建物位置の変遷を示した図である。現在地に移転した①明治34（1901）年から⑥昭和36（1961）年までで、⑤と⑥は変化ない。かつて正門が白川側にあった関係で、①～④正門から敷地を見た図となっており、下が北となっている※。①～⑤までの本荘北地区の敷地外形と三の井手を現在の地図に重ねたのが図76である。古い地図は、地図としての精度がやや低いことと、敷地の外形は区画整理や河川改修工事等に伴い少しずつ変化している。このため、すべての地図に共通する敷地の東側にある直線的な地割と、三の井手の東側の敷地への入り口を合わせた。三の井手は、敷地内に入ると南に曲がり、敷地の中央やや北側をしばらく直線状に南西に流れる。そして、最後にもう一度南に曲がり敷地外に出る。①と②の地図の三の井手の流路は、敷地内に入ると白川寄りに西に向かった後、やや急に南に曲がる。③～⑤も同様であるが、敷地内に入ってから①②ほどは白川寄りに向かわずやや南向きに進み、①②よりも手前で南に曲がる。直線区間に入る地点はほぼ同じであるから、曲がり方が緩やかである。このようにみると、①②と③～⑤で大きく流路が分けられる。図76（左）中の矢印は、今回検出した井手遺構の位置である。これに位置や向きが近いのは①②で、①がもっとも近似する。図76（右）は、①②の図を三の井手の敷地への入り口と出口で合わせたもので、同じく井手遺構に近く、①がより近似する。現在地への移転時には、検出された井手遺構が三の井手として活躍していた可能性が高いと考えられる。そして、水路の変更時期としては、外来患者診察所が建設された③の時期が浮上する。外来患者診察所は鉄筋コンクリート造りで地上３階半地下１階、玄関ロビーにはエレベーターが設置され、当時熊本市内ではもっともモダンな建物として威容を誇ったという。敷地内の正門・本館・病棟の位置関係から、建設にふさわしい位置は正門入って左手となり、図77をみると建設スペース確保のために三の井手の位置を変更した可能性が高いと考えられよう。

少しさかのぼり、移転前の様子を見てみる。明治元（1868）年の地図と、移転時の地図（図74の①）を重ねてみると図78のようになる。照合は、現在の地図・大正13年の地図・明治13年・明治45年の地図で、目印となる構築物や地割をもとに行った。明治元（1868）年の地図では、三の井手は東側ではかなり小さな蛇行をくりかえしながら西流し、急な角度で南に曲がっている。一方、移転時の地図の流路は、かなり整然としたものであり、移転時にも流路を整備した可能性がある。

以上をまとめると、外来患者診察所建設時の流路変更により、今回検出した井手遺構が廃絶された。さかのぼって、本地地区に県立病院が移転した際にも、三の井手が整備・流路変更されたと考えられるが、この時は江戸期の井手の一部分は残し、活用しながらであったと考えられる。外来患者診察所



① 現在地へ移転当時（明治 34 年）　② 熊本医学専門学校移当時（大正元年）　③ 外来患者診察所完成当時（昭和 3 年）

④ 熊本医科大学附属医院火災当時（昭和 10 年）　⑤ 昭和 30 年ころ（正門はまだ白川側）　⑥ 昭和 36 年末ころ（正門が産業道路側）

図 75　熊本大学病院敷地内変遷図

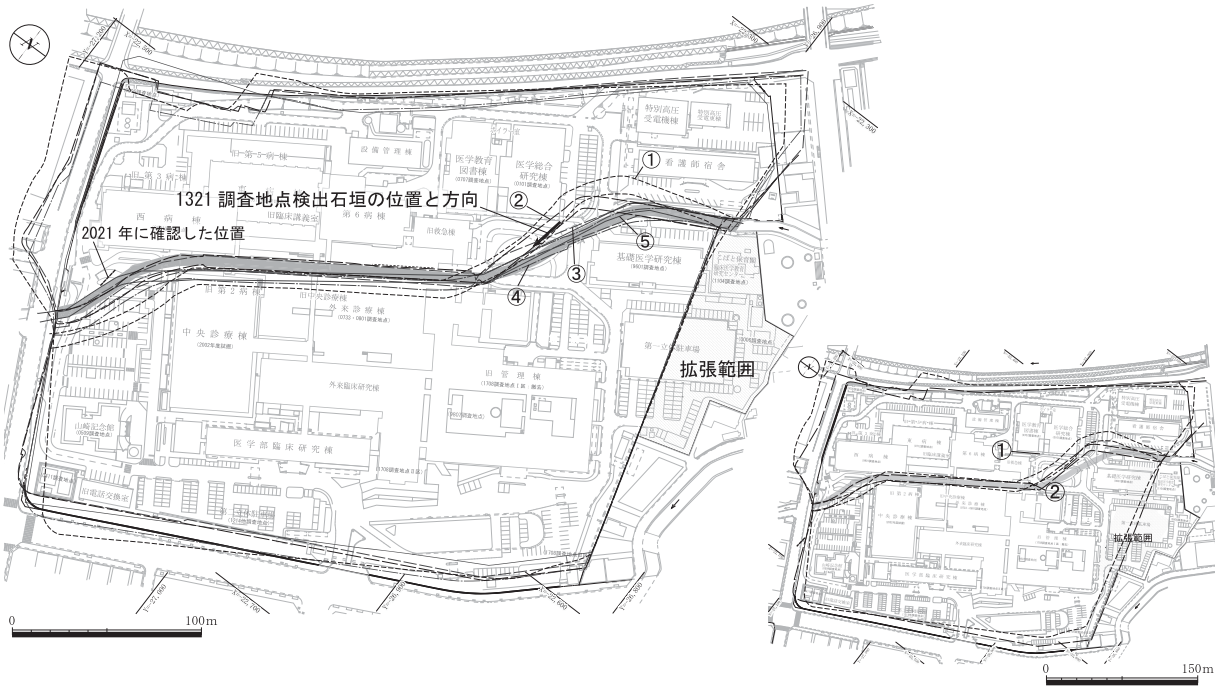


図 76　熊本大学病院内各時期の井手（暗渠）流路と井手遺構の位置関係図（S=1/5000・1/7500）

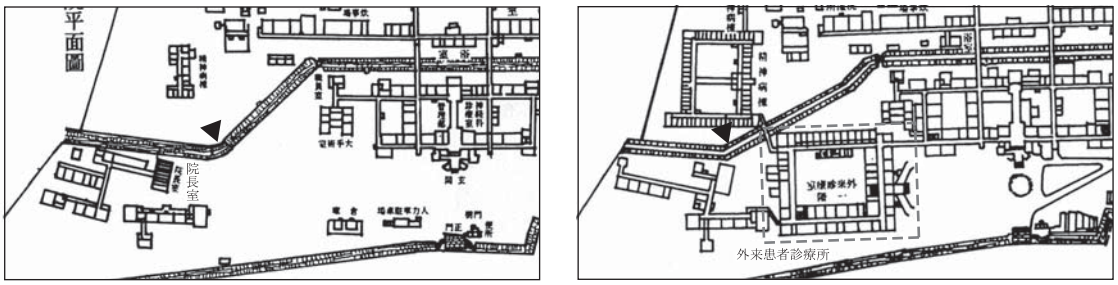


図 77　外来患者診療所の位置および建設前と建設後の三の井手の流路

建設時の流路変更時まで残る井手遺構は、江戸期の石垣築造の特徴を備えているからである。

加藤清正が築造してから、江戸時代後期までの変遷を辿ることはできなかった。ただ、件の外来患者診療所跡地にて2001年に実施した0101調査地点（大坪編2010）では、調査区南側で旧河道が検出されており、図78中の円（破線）の部分に相当する可能性がある。

流路の変遷　少しさかのぼり、文久４（1864）年の地図に現在の井手の大略の流路をのせてみると、一の井手・二の井手・三の井手の全体わたって流路に違いがあることが分かる（図79）。一の井手の

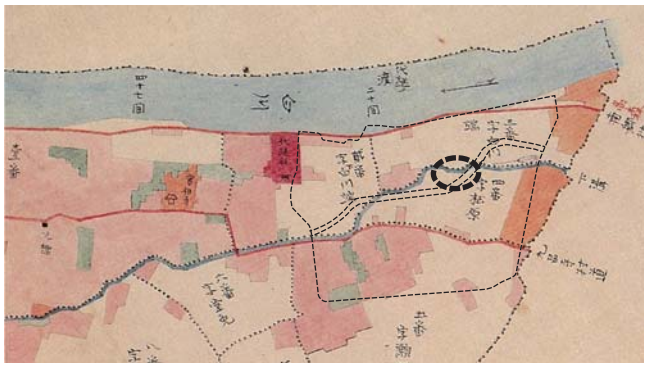


図 78　明治元年と移転時の三の井手の流路

図 79　文久４年の地図と現在の井手の流路

（図78・79　熊本博物館所蔵）

❶付近の大井手の底の間知石（西より）　❶付近の大井手の底の間知石（北より）　❷付近の大井手（西より）

❷付近の宮の本橋の下（北西より）　❷付近の大井手の底の間知石（北より）　❷付近の大井手の底の石垣（北より）

図 80　現在の各井手の流路（左上）と大井手底で確認された間知石・石垣

分岐点はほぼ変わりないが、対象範囲のためなのか、文久４（1864）年の地図では現在の一の井手の流路が描かれていない。現在の二の井手・三の井手は、一の井手の下流で大井手から分岐するが、文久４（1864）年の地図では、途中途切れているが大井手から分岐した一の井手に繋がるように見える。

一の井手が現在のように南にあったとしても、二の井手・三の井手が大井手ではなく一の井手から分岐したことになる。さらに、文久４（1864）年の地図には、大井手が白川に還流する手前から分岐し、白川に並行する水路が描かれているが、現在そのような水路はない。図80下段の写真は、現在の大井手の底で観察できた間知石や石垣で、今回の検出した井手遺構に類似する。石垣は概ね東西方向を向いている。図79の大井手は、一の井手の分岐点の少し上流で東西方向に流れており、この部分に相当する可能性がある。

このようにみると、大井手や３本の井手は、街づくりや白川の氾濫など様々な要因のもと、各所で時期も違えて流路が数回改変されていることが分かる。

２．まとめ

本荘北地区では、敷地の西半を中心に病棟や研究棟など大型建物の建築に伴う発掘調査が実施され、古墳時代や古代の集落の様子を把握してきた。今回の発掘は、初めて東側中央部で実施したが、先述のように、全体象を把握するのは困難である。しかしながら、例えば2017年に実施した1708調査地点（吉留・山野編2020）と合わせると（図81）、溝の繋がりや方向などが判明したものもあり、遺構の展開が把握できた。また、0101調査地点において検出した旧河道は、三の井手との関連の可能性が浮上するなど、少しずつではあるが本荘北地区東側における遺構配置を把握する情報が積み重ねされていると実感する。

今回の発掘調査範囲でも、「枚本寺」と刻書された土師器が数多く出土した。9601調査地点（小畑編2008）の発掘調査以来、資料は少しずつ増加している。本荘地区の東側の字名は「九品寺」であり、その音読みが「くほんじ」で共通することから、枚本寺という寺があったと推定されるが、既往の構内調査では、寺の存在を示すような遺構はまだ検出されない。本荘北地区構内に存在するのか、引き続き注視しつつ発掘調査にあたる必要がある。また、今回の発掘調査では、古墳時代の遺構・遺物が少なかった。本荘北地区西側では、布留式期の竪穴建物がかなり良好な状態で多数検出されるが、東側ではそのような状況はなかった。今回は部分的な調査であるので、今後、古墳時代～古代の集落範囲と変遷が解明されることに期待したい。

今回の調査成果や大井手の底に痕跡が残されていることからすると、現在の井手の近くにも昔日の井手の痕跡が眠っている可能性を示している。現在、一の井手・二の井手・三の井手は、本荘北地区内のみならず、ほとんどが暗渠として熊本市内の地下を人知れず流れている。本来の流路を復元する作業は容易ではないが、井手周辺における土木工事や今後の調査次第では、手がかりが得られる可能性もあり、注意を喚起したい。

1708調査地点の調査成果では、当地に県立病院が移転・設立した際、整地したことが土層の詳細な観察から伺われた。今回の調査でも、かなり離れた地点の出土遺物が接合し、相当規模の整地があったことを追認した。一方で、威容を誇ったという初代の外来患者診療所の跡地における0101調査地点では、18世紀～19世紀以降と考えられる畑の畝が整然と検出されており、この一帯で大規模な整地がなされたとは考えられない。この整地範囲の境界は、三の井手と推定される。いずれにせよ、本荘北地区は、地形と近現代の整地の影響など、土層は地点によって複雑に異なることを確認した。近代に

おける本学の来歴と発掘調査成果の照合の成果を、次の調査へと活かしたい。

敷地西側における古墳時代・古代の集落跡（9901調査地点）で、大溝を検出している（大坪編2014）。溝の埋没後に、掘立柱建物が立てられているから、溝の掘削は古墳時代にさかのぼる。この地点では、大小多くの溝が掘削されていた。本荘北地区の土地利用の変遷は、溝の機能解明が一つ鍵になりそうである。

引用・参考文献

網田龍生　1993「古代肥後の土器」『大江遺跡群』Ⅱ　熊本市教育委員会

網田龍生　2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究』Ⅳ　pp.357－386

大坪志子編　2014「１.（医病）病棟（軸）新営工事に伴う発掘調査（9901調査地点）」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告書Ｘ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第10集　熊本大学埋蔵文化財調査センター

大坪志子編　2010「２.（医病）医学部総合研究棟新営工事に伴う発掘調査（0101調査地点）」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第６集　熊本大学埋蔵文化財調査室

小畑弘己・大坪志子編　2008「１．医学部校舎建設に伴う発掘調査（9601調査地点）」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第4集　熊本大学埋蔵文化財調査室

熊本大学医学部百年史編纂委員会　1998『熊本大学医学部百年史＜通史＞』熊杏会

熊本日日新聞社　1988『図説　熊本・わが街』熊本市制100周年記念

高瀬哲郎　2014「第５節　高麗門一帯の石造遺構について」『熊本城遺跡群』熊本県文化財調査報告第303集　pp.390－397

日本学士院編1981「第5節　石垣」『明治前 日本土木史（新訂版）』財団法人　野間科学医学研究資料館　pp.479－481

原田範昭　2013「１．８世紀後半の土器」『二本木遺跡群』21　pp.239－271　熊本市教育委員会

原田範昭・美濃口雅朗編　2004『古町遺跡』Ⅰ　熊本市教育委員会

本田彰男　1970『肥後藩農業水利史』熊本県土地改良事業団連合会　pp.54－57

吉留広・山野ケン陽次郎　2020「１.（医病）基幹・環境整備（旧管理棟取壊し）工事に伴う発掘調査（1708調査地点）」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告書15』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第15集　埋蔵文化財調査センター

図の出典

図74・76　熊本大学医学部百年史編纂委員会　1998『熊本大学医学部百年史』熊杏会　P196、198、205、210、217、220

図77　新熊本市史編纂委員会　1993『新熊本市史』別編 第一巻 絵図・地図　下　近代 現代　熊本市　P63

図78　新熊本市史編纂委員会　1993『新熊本市史』別編 第一巻 絵図・地図　上　中世 近世　熊本市　P29

図79　市街地図：地理院地図（電子国土 Web）

図79　写真：大坪志子撮影

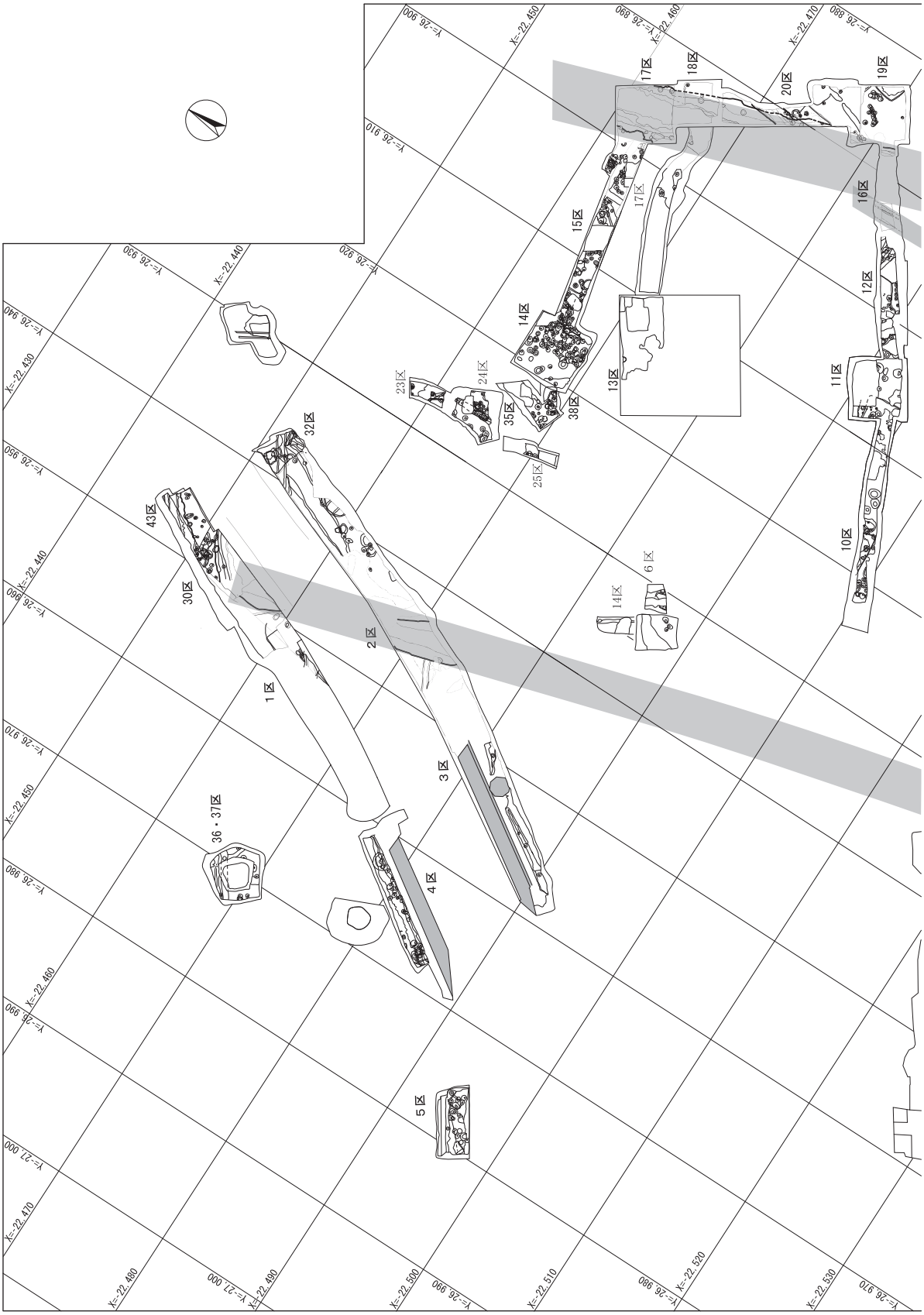

X=-22.430
X=-22.440
X=-22.450
X=-22.460
X=-22.470
X=-22.480
X=-22.490
X=-22.500
X=-22.510
X=-22.520
X=-22.530
Y=-26.940
Y=-26.950
Y=-26.960
Y=-26.970
Y=-26.980
Y=-26.990
Y=-27.000
Y=-26.920
Y=-26.910
Y=-26.900
Y=-26.890
Y=-26.880
Y=-26.970
Y=-26.990
Y=-26.990
1区
2区
3区
4区
5区
6区
10区
11区
12区
13区
14区
15区
16区
17区
18区
19区
20区
21区
23区
25区
30区
32区
35区
36・37区
38区
43区

図81　1708調査地点および1321・1322・1325調査地点遺構配置図（S=1/400）

Summary

In 1985, Kumamoto University planed a reconstruction of campus. But it was known that some of campus is designated as buried cultural assets zone. In the fiscal year 1994, Kumamoto University formed the Archaeological investigation committee and the Research Center for buried Cultural Properties in haste, and has been excavating the campus sites when the superannuated school buildings were rebuilt.

We have two main campus sites at different areas. The one is the Kurokami area where is constituted of faculty of Science and faculty of Engineering (south area), faculty of Education, faculty of Law, and faculty of Letters (north area), and included in Kurokamimachi site. The site is located at the foot of Mt.Tatuta on a low terrace formed by the Shirakawa River. The site is regarded as an ancient posting-station "Kokai". The other one is the Honjo area where is constituted of School of Medicine, Kumamoto University hospital and institutes (north and middle area), school of Health Science (south area), and included to Honjo site. The site is located on a low terrace formed by Shirakawa River, similar to Kurokamimachi site. It is 2km from Kurokamimachi site to Honjo site in a straight line. In the circumstance of Honjo site, there are large ancient settlement sites like Oe site and Shinyashiki site. School of Pharmacy and Oe athletic field (Toroku area) belong to Oe site. Kyomachi area where is constituted Elementary School and Junior High School Attached to faculty of Education is belong to Kyomachidai site. The site is located on the Kyomachi plateau, and is famous for as the site of Yayoi period.

The results of the excavation investigation of survey areas 1321・1322・1325 in Kumamoto University Hospital (Honjo north area) in the fiscal years of 2013 and 2014 are published in this report. We excavated the survey area 1321 before the piping construction of draining equipment, the survey area 1322 before tree transplanting, and the survey area 1325 before the building of electrical equipment. These small investigation areas are connected and excavated. We had mainly investigated the west and the north side of Honjo north area, and discovered the pit dwellings, embedded-pillar buildings, ditch, wet paddy site and a lot of relics of a village of Kofun period and ancient times. A ditch of Yayoi period was also discovered. Meanwhile, there are few investigations on the east side center of Honjo north area.

On this east side, we discovered pit buildings, ditches, and pits of ancient times, which revealed that an ancient village existed widely in the east side of Honjo district as well. Many Haji wares with incised character "Kuhonji(枚本寺)" were excavated. Much resource tends to be on the east side of Honjo north area since the Haji ware with incised character was excavated for the first time at survey area 9601 located northwest of Honjo north area. This result suggests that the temple was more likely to be located on the east side of the Honjo north area. But the remains of an ancient structure which could confirm the existence of the temple have not been discovered yet. The presence or absence of the temple and the elucidation of the location are important problems in examining Honjo north area and neighboring site. On the other hand, not many relics and features in the Kofun period were found at this investigation area. It is expected that the distribution feature is different between Kofun period and ancient times.

The biggest result in this investigation is the discovery of Ide remains which are an irrigation ditch of Edo period. At a repair point of the San no ide (culvert) which crossed Honjo north area, we found a stone wall. It is said that Kiyomasa KATO (1562-1611) built the San no ide. However, the stone wall is regarded as the thing which belongs to the latter half of the Edo period by a characteristic of the wedge-shaped stone "kentiisi". The stone wall seems to have been renovated several times over the years. This discovery of old Ide will become one clue to the transition of Honjo north area and the town planning of the castle town Kumamoto.

Although each investigation area was narrow, the results are significant for understanding the development of the site in the east side of the Honjo north district, together with those of survey area 1708 that we reported earlier.

概　要

1985年，熊本大学曾计划过现在校园的重建开发项目。然而得知校园内几个地区是被指定的地下文物的埋藏地。1994年，熊本大学作为考古研究机构迅速成立了文物保护研究所，在重建老朽化建筑物时，对校园地下进行挖掘调查。

大学有两个主要的校区。第一个是属于黑发町遗迹群的黑发校区。黑发校区由教育学部，法学部，文学部（北地区），工学部和理学部（南地区）组成。遗迹位于立田山的山脚下，在白川形成的低阶地位置，推断古代的车站「蚕养」站就是在这。

另一个是属于本庄遗迹群的本庄荘校区。本庄荘校区由熊本大学附属病院（北地区），熊本大学医学部（中地区），保健学科（南地区）组成。遗迹位于白川的低位阶地上，与黑发町遗迹群类似。黑发町遗迹群和本庄遗迹直线距离相隔2公里。本庄遗迹的周围有大江遗迹群和新屋敷遗迹，都是巨大的古代村落遗迹。熊本大学的药学部和运动场（渡鹿地区）都属于大江遗迹群。教育学部附属小学校和中学校所在地京町地区属于京町台遗迹群。遗迹是位于京町台地上，作为弥生時代的遗迹非常有名。

本报告介绍了2013年至2014年在熊本大学附属医院（本荘北地区）内的 1321、1322 和 1325的挖掘调查结果。1321调查点与设置排水工程有关，1322调查点与移植树木工程有关，1325调查点与设施电力工程有关，将以上调查点挖掘成小型调查区域进行挖掘调查。在本荘北地区，主要已北侧和西侧为中心进行了发掘调查，发掘调查了古坟时代和古代集落。发现了坑楼、立柱楼、沟渠、水田等遗迹，还发现了一处弥生时代的沟渠。此调查地点位于调查案例较少的东侧中心。

在这次发掘调查中，发现了古代的坑楼，沟渠、坑，在本荘北地区的东侧发现了大型的古代集落。还出土了大量刻有「枚本寺」的陶器。这个刻字的陶器最初出土在位于遗址西北部的9601调查地点，很多出土遗物都倾向出土在遗址东侧，说明寺庙遗址有很大的可能是位于遗址东侧，但是尚未确认出任何遗迹。在考察本荘北地区和周边遗迹时，最重要的是解释清楚寺庙的遗址位置。另一方面，该调查地点出土的古坟时代的遗址，遗物都很少，可以预测古坟时代和古代遗址分布有很大差异。

在这次的挖掘调查中最重要的是发现了江户时代的水渠遗址。横穿了挖掘现场三处水渠（暗沟）的工程地点，发现了石垣。据说是加藤清正时期挖掘造成了三处水渠，但从方锥石的特征来看，推测石垣是江户时代后期经过了屡次改修形成的。旧的三处水渠遗址的发现将成为本荘北区变迁和熊本市城下町发展变迁发展的线索。在本次挖掘调查中，虽然调查区域较小，但与以上报告的1708调查点挖掘结果连结起来将是了解本荘北区东侧遗址挖掘情况的重要成果。